

まんだら通信

第176号(通巻208号)

平成23年(2011)02月 佛誕2577年 皇紀2671年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

小さなお財布

二月。如月。
暦の上では春ですが、本当の寒さはこれからが本番。

この月の十五日の夜は、お釈迦さまが二千五百年前に、北インドのクシナガルという寂れた村外れの、二本並んで立つサーラ樹の根元でお涅槃に入られた日ですね。

私たちの総本山智積院でも、十四日のお速夜にはお坊さん総出で、お涅槃の夜の最後のお教え『佛遺教経』を節付きで唱えし、翌十五日にはお釈迦さまへの感謝を込めて涅槃会(浄楽会とも)を開きます。

この法要には、四百年前に和歌山の根元から、初代の能化様玄宥僧正と一緒にこの京都に来た由緒あるお檀家の人たちも、威儀を正し三々五々お参りに来て、静かにお

釈迦さまを偲んでおられます。

このお経、名前からもわかるように、お釈迦さまのご遺言ですね。

今まさに娑婆世界に別れを告げ、もとの仏さまの世界に帰って行くこととするその時まで、お弟子達やその向こうにいる世間の人たちを思いやる温かいお心が、ひしひしと伝わって来ます。

殊にお釈迦さまを慕うこと生みの母へのようであったと言われる、京都梶尾の明恵上人が節付けをしたこのお経を、智積院金堂の、寒くて広い部屋で修行僧達が朗々と唱える声を聞くと、まるでわたしが今クシナガルのその場所にいるような、そしてまた、私一人のためにお説き下さっているような、厳かな感動に包まれます。

偶然そうなったのかも知れませんが、お釈迦さまはルンビニのアシヨカの木の下で生まれ、ブツダガヤの菩提樹の下で悟り、今また沙羅双樹の間で涅槃に入られます。

悟りを開かれて仏陀と尊敬される立場になつてからも、請われれば国王・大臣・大金持ち・売春婦・皮剥ぎ職人から泥棒に至るまで、相手に一番分かりやすい言葉で、懇切丁寧に四十年、幸せになる教えを説き続けました。

「今まで繰り返し説いてきたことではあるけれども」と前置きして、色々の教えをお説きになった中に、「少欲を心がけなさい」という教えがあります。

「多欲の人は媚び諂ひ、人の気を引こうとし、物に対しても際限なく欲望を膨らますため、一生かかっても満足することが出来ない。」

少欲に努めれば心が穏やかになり、憂いや怖れの心から離れることが出来るので、心安らかに過ごすことが出来る。あつけないほど当たり前の話で、「最後の教え」などと何を大げさな、と思つて

しまいますが、私はせめてこの一つだけでも、何とか実行したいと思つてきました。それが標題の『小さなお財布』です。

どうしても十万円欲しいと思つたときは、我慢して一万円しか入らないお財布を持つことにします。

若し十万円入つてきたとき、九万円は私の手許になくても過ごせるわけですから、私以上にそのお金を有効に生かせる人がいれば、そちらに回せば宜しいということですね。

これはお金に限らず、生き方総てに当てはまることで、このように考え、行なうことでストレスは随分減る筈です。私の白髪が少ないのはこのせいかも知れないと、半分本気で思っているくらいです。

また、『欲』は自分中心の考え方のことでもありますが、高速道路無料化、子ども手当で、色々の補助金はみんなどこかおかしいということに気がきます。何故って、何れも税金という他人様のお金が多くなっていくわけですから。

このことは私だけが言っているのではなく、大方の人がそれよりもっと必要なのではないでしょうか。思っていること

もともと日本人は他人様の困り事を黙つて見過ごすことが苦手な人たちですから。

写真について

平成19年12月号「ブツダ最後の旅に行く」に涅槃堂の全景を載せました。

これはお堂の中の様子です。私たち一行がお参りしたとき、タイあたりの人たちと思いますが熱心にお経を上げていました。

この涅槃堂は6メートルの大きさだそうで、荒廃していたものを、ビルマの仏教徒がお金を出しあって再興したのだそうです。

余滴

◆毎朝6時に梵鐘を突きます。どうかすると寝過ぎて失敗することもあるのですが、一番寒い時刻ですから、気合いを入れて外に出ないと風邪が心配です。立春が過ぎて日が伸び、夕方5時の鐘は随分明るくなりましたが、朝はまだ殆ど変わりません。突いている本人にはうるさいばかりですが、遠くで聞く梵鐘は如何にも日本の風景に馴染んで、長閑でいいものです。30何年前、初めてインド巡礼に行ったとき、ブツダガヤの日本寺に泊めてもらいました。夕方、日本式の梵鐘の音がしま

した。紫雲寺と同じ京都、太秦の岩澤さんが納めたものだそうで、ビハールの大平原に沈んで行く太陽との相性が殊の外良く、しばし聞き入ったことを思い出します。◆時々お寺に黙って、俗名のままよそでお葬式をするお家があります。あとで聞くと「遠くまで来てもらうのは迷惑だと思ひまして」というお返事。お寺とお檀家は身内と同じです。遠近は関係ありません。亡くなった人の気持ちになれば、見ず知らずのお坊さんのお経より、私の方がいいに決まっています。

◆数日前のNHK朝のニュース。今年初め北陸の方で、多くの車が雪に閉じこめられるということがありました。その時、沿道の人たちが自宅のトイレをお貸ししたり、熱いうどんを作ってあげたり、色々の親切があったそうで、そのお礼の手紙が続々と届いている、というお話でした。兎角、聞きたくもない話が多いこの頃、久し振りに「日本ってまだまだ捨てたもんじゃな」と思いました。◆今を盛りの菜の花に、寒さを避けて引っ越してきたセイヨウミツバチが来ています。もうじき春です。 2011/02/09 龍渉



につぼん人情小噺

三遊亭鳳豊

第六十二話 ドクターネット

えー、人間、健康が何よりでございますね。

夜中に家の近くで、救急車のサイレンの音がしますと、人ごとながら心配になります。

実は、私の大師匠の先代三遊亭円楽も、脳梗塞を起こしまして、救急車で運ばれたことがあるんでございます。あとで師匠連から聞いた話ですが、その時、道が大変に混んでおりまして、救急隊員が「どうしよう、高速に乗ろうか」と相談しているのを聞いた師匠、思わず叫んだそうです。「ノー・コースク」……。

今日は、長崎のあるお医者さんのグループと患者のお母さんの話を書きます。長崎のある病院に、ひとりの重度心身障害児が入院していました。名前はひろし君（仮名）。

彼は、身体も自分で動かすことができません、もちろん、話すことも、自力で食べることもできません。しかも、難病ですから、完治の見込みもありませんでした。

ひろし君にとつての救いは、お母さんの真理子さん（仮名）が、ひろし君を心から愛していることでした。真理子さんは朝八時に病室に來ると、夜七時までひろし君につきつきりという生活が、もう数年も続いています。

そんな時、真理子さんは夫から離婚を言い出されました。夫の面倒を見切れなため、夫が浮気をしていることは分かっていたのですが、あまりの夫の態度の急変に怒り、はじめて夫に対し、大声を出して暴れました。

そんなことをしたつて何も解決をしな

いことは分かっていた。でも、真理子さんには、そうするしか方法がなかったのです。離婚は翌月成立しました。

その時、真理子さんは決心をしたのです。愛するひろし君を自分の家で、自分が面倒みようと。

誰に相談したつて、それは無理なことにはつきりしています。しかも、夫が去つていつてしまったのですから、生活費もままなりません。案の定、すぐに生活保護を受けなければ生きていけない状況になつてしまいました。

でも、いったんそう決心した真理子さんの気持ちは変わりません。さっそく、病院に相談しました。

すると、思わぬことが起こつたのです。病院の先生が、ひとりの開業医を紹介してくれました。藤井卓先生といひます。

お父さんの代から続く町の病院の院長先生です。なぜ、藤井先生を紹介されたかと言つと、藤井先生は長崎在宅ドクターネットという組織の代表だつたからです。

長崎在宅ドクターネットというのは、長崎の開業医の皆さん、病院の勤務医が集まつて、家に帰りたいという患者さんの希望をかなえてあげようという組織なんです。

たとえば、Aさんというおばあちゃんが末期ガンのため、病院ではもうこれ以上治療ができない。チューブでつながれたまま、このまま亡くなるまで病院にいるしかない。「だつたら、自分の家でゆっくり余生を過ごしたい」と思つたといひます。

ところが、Aさんはご主人が亡くなつてしまつていて、お子さんたちは独立して、遠くに住んでいる。だから、家には戻れない。そりやそうですよね。

家に戻つても、生活ができないわけですから。家族も病院に入院してくれていひた方がはるかに楽なわけです。見舞いに

行けばいいんですからね。

そんな時、Aさんがどうしても家に帰りたいと願つていたのであれば、それを實現させてあげようというのが、藤井先生たちの考えです。

藤井先生たちは「医者には患者の病気だけを診るのではなく人生を診よう」という精神で、患者さんの人生の最期は患者さんが決めるべきだと考えているのです。

では、具体的にどうするのか。藤井先生は、病院から話を開くと、Aさんの住所をはじめとして、病氣の内容、これまでの治療法、家庭環境などをパソコンに人力します。すると、Aさんの家の近くの開業医が立候補します。藤井先生は、そのなかから二人の先生を選び、Aさんの主治医と副主治医に指名します。

先生方は治療法を病院の担当医と相談しながら、患者さんを診ます。主治医と副主治医の次に、訪問看護師が決まります。看護師が決まると、管理栄養士、ケアマネージャー、ヘルパーも決めます。

こうして、スタッフが決まると、みんなで治療と介護がはじまるのです。そして、悪くなれば、また入院させます。入院と家を繰り返す人もたくさんいます。最期の人生が病院に入院しつぱなしという事態を避けることができるのです。

「みなさん、ご家族が感謝してくれます」と藤井先生は言ひます。ひろし君の場合も、藤井先生のルートに乗りました。

しかも、お母さんの真理子さんがついていひますから、生活費の面を別にすれば、完璧でした。でも、病氣の進行は止められませんが、ひろし君は、数カ月後、とうとう亡くなつてしまいました。

真理子さんは、生きて行く力を失ひそうになりまひました。夫もいひない、それまで心の支えだつたひろし君も亡くなつた。仕事もない。このまま、どうやつて生

きていつたらいいのか。

葬儀も終わり、すべてを失つた思ひの真理子さんは、ある日、ふと思ひ立ちました。

「ひろしの最期は、みなさんの力で支えられた。そうだ、私も、多くの人の力になりたい」

真理子さんは、四十歳に近づいたその年に、准看護師になるための学校を受験し、見事に合格しました。

いま、真理子さんは若い女性たちに交じつて必死で看護の勉強をしています。

いつものように、三遊亭鳳豊さんがMOKU二月号にお書きになつた人情小噺を転載させていただきます。

お力添え、有難うございます

- 東京土屋茂夫様 栃木掛川もと子様
- 館山加藤石油様 東京高松かず子様
- 東京山口サチ子様 白浜星野徳次郎様
- 船橋田村はるい様 白浜中本行政様とご友人
- 末永一之進 小西正信 吉澤新 田所三明
- 池田一男 清野守正の皆様
- 鴨川 観音寺様 富津 大網昇様
- 千倉 長性寺様 成田 匿名希望の読者
- 白浜高山寛様 白浜中村哲也様

紙面の都合やうっかりで、先月号に載せきれなかつた方々の分や、この一ヶ月に戴いたご寄付です。先日ご法事に行つたお宅で、いつの間にか貯まつたので、一円玉をどっさり戴きました。数えたら一千円近くありました。

スリランカで使えば、その十倍の値打ちがあります。そのスリランカですが、ニュースなどでご存知のように大雨の被害が広がり、幸いなことにアンギラサ師のお寺や、奨学生の住んでいるところは大丈夫というメールを貰ひましたが、全国的に野菜や米の値段が三倍になつてしまつたそう、ただでさえ暮らし向きが大変な子どもたちの家のことを思うと心が痛みます。近々來日するアンギラサ師に、暖いお心が籠つたお金をお渡しします。